

Title	自伝的小説を超えて： マルグリット・デュラス『静かな生活』(1944年)再読の試み
Sub Title	Au-delà du roman autobiographique : essai de relecture de La Vie tranquille de Marguerite Duras (1944)
Author	村石, 麻子(Muraishi, Asako)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2016
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.21, (2016.), p.17- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20161201-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自伝的小説を超えて——マルグリット・デュラス 『静かな生活』（1944年）再読の試み

村石 麻子

1944年出版の『静かな生活』¹は、デビュー二作目の自伝的小説である。その6年後に出版された同じく自伝的小説『太平洋の防波堤』に比べると、圧倒的に読まれることも論じられることも少ない作品だが、それはおそらく哲学的な難解さが原因であろう。とはいえこの作品は、デュラス自身のちに「30年ぶりに読んでみて素晴らしいと思った作品²」と銜いなく自画自賛する自信作だけあって、独特な小説世界を構築しており、さらなる考察に値するものとわれわれは考える。一見晦渋さが目立つ作品も、実はのちの文学的方向性を示唆するメルクマールの作品、さらには自伝的小説を超える広く深い射程を持った作品ではないだろうか。そうした問題意識から本稿は、これまで注目されることの少なかった『静かな生活』に焦点を当て、分析を進めたい。

これは、女主人公フランスウが家族問題を克服して自立を勝ち取るまでの精神的成熟を描いた一種の教養小説である。舞台はフランス南西部の田舎町、物語は、弟ニコラが叔父ジェロームを死に至るまで激しく殴るシーンに始まる。ジェロームは投機に失敗し、兄の勤務先である市役所から公金を持ち出して借金返済を図ったため家族に疎まれていた居候の身だ。ニコラは、その憎き叔父が彼の妻である女中クレマンسと関係を持ったと聞きつけて、激昂したのだった。しかし物語の暗部は、その秘密をニコラに漏らしたのはほか

¹ Marguerite Duras, *La Vie tranquille*, Paris, Gallimard, 1944, coll. « Folio » 1341, 1996. 日本語訳は白井浩司『静かな生活』（講談社、1970年）を参照した。

² Marguerite Duras, *Écrire*, Paris, Gallimard, 1993, coll. « Folio » 2754, 2003.

でもない姉のフランスウであり、語り手でもある主人公こそが、忌むべき殺人事件のきっかけを作ったことにある。

そうした陰惨な家族劇に終止符を打つかのように、ティエヌという青年が住み込みで働くようになり、徐々に一家を往年の苦悩の日々から解放していく。この救世主の如く現れた美しい青年にフランスウは密かに思いを寄せる。その一方、ニコラが恋していた近隣のブルジョワ子女リュスもティエヌに恋心を抱いている。しかしティエヌが最終的に選んだのはフランスウであり、リュスの足も遠のいていく。そして自らの決定的失恋を悟ったニコラは、自殺以外の選択肢をついぞ見つけることはない。

ニコラの死を境に、フランスウは海辺の町で休養するなか次第に心の傷から癒えてゆく。休暇から戻るとティエヌから結婚の申し出があり、二人で両親に婚約を報告するところで、物語は幕を閉じる。

まずこの小説が自伝的小説の範疇に留まらない多角的な作品であることを解明し、次にカミュ、フォークナー、福音書、コヘレトの書など様々な影響関係を探りながら、この作品の主題の核心に迫る。最後にそれらのテーマ系が成熟期の作品においていかに深化されていくか検証する。

自伝的小説を超えて

本稿で扱う『静かな生活』は、1943年出版の処女作『厚かましき人々』³、1950年出版の第三作『太平洋の防波堤』⁴と併せて初期自伝的小説という位置づけだが、それら二作と比較しても、自伝的小説の枠組みに囚われない複層的で実験的な野心作であることがわかる。

まずアジアを舞台にした『太平洋の防波堤』は、官僚批判を含みド・ゴール政権下の植民地政策に異を唱える反体制的な作風からゴンクール賞を逸した背景もあり、政治的意図が強く勧善懲悪思想が色濃い。一方の『静かな生活』は、こうした二元的世界観に基づくドラマチックな虚構装置が読み手の

³ Marguerite Duras, *Les Impudents*, Paris, Plon, 1943 ; Paris, Gallimard, rééd. 1994.

⁴ Marguerite Duras, *Un Barrage contre le Pacifique*, Paris, Gallimard, 1950 ; 2000.

感情を揺さぶることがない代わりに、精神の機微をうがつ心理分析が作品に深みを与え、読み手を哲学的思索にいざなっている。

また、同じフランス南西部ドルドーニュ地方を舞台にしていながら、『静かな生活』が処女作『厚かましき人々』と決定的に袂を分かつのは、文体的洗練と主題の深化である。まず処女作に顕著であった紋切型表現などの修辞上の稚拙さが見事に克服されている。また大衆小説家デリーの影響でブルジョワ道德に基づく純愛至上主義が色濃かったが、そうしたシンデレラコンプレックスにも似た男性への依存・救済願望が払拭され、死という人間の不可避の命運に主題がシフトしている。

このテーマの深化には、小説の人物造形にも垣間見える執筆背景がある。処女作が当時ガリマール社の編集者だったデュラスの再婚相手ディオニス・マスコロに捧げられているのは、辛辣ながら建設的な批評でデュラスの作家活動を支え、当時まだまだ珍しかった女流作家を後押しした、よき理解者への深い敬意と愛情の表れであろう。確かに『静かな生活』においても、そうした救世主的男性像がティエヌを通して描かれているが、それ以上にデュラスの心を占め、作品の主題になるまでの伝記的背景があった。それは、小説執筆にとりかかる前年の 1942 年 12 月に受けた、下の兄ポールの訃報である。上の兄を溺愛した母親に見放された下の兄と少女マルグリット。閉ざされた世界で近親相姦にも似た深い情愛を育んだ二人の精神的絆が強固なものだったことは想像に難くない。主人公が弟ニコラの死を弔い前に進もうとするように、作家もまた、その死に立ち会えなかった無念の思いを乗り越え、兄の见えない存在を胸に、自らの人生を引き受けようと葛藤していたのではないか。またデュラスはそれ以前に下の兄だけでなく自らの子の喪にも服しており、ニコラの幼子の描写には、1942 年 5 月、戦時中の食糧不足による栄養失調も相俟って死産した、最初の夫ロベール・アンテルムとの間の子の影がちらつく。

つまり『静かな生活』は、マスコロというメンターを得て作家としての素養を培う一方、死産と下の兄の死という精神的な試練を乗り越えた密度の濃い時期に執筆されたということだ。またこの作品は、私生活のみならず時代

も混沌としていた戦後初期に出版されたことを喚起しておきたい。1944年夏ド・ゴールによるパリ解放によりドイツ軍が降伏し、事実上第二次世界大戦が終結した。しかしその一方、同年春、アンテルムがレジスタンス活動に参与する政治犯として拉致されており、夫の消息が掴めない不安のなか出版を迎えた作品であった。そして出版直前の12月初めには、戦中記録『苦悩』⁵にも描かれるラビエ改めシャルル・デルヴァル、ドイツ警察にユダヤ人を売り渡していたある対独協力者の証人喚問に出頭している⁶。時を同じくしてガリマール社でも、ドリュ・ラ・ロシェルを始めとした対独協力作家の大規模な粛清が行われていた。そうした当時の複雑な歴史的背景にもかかわらず出版にこぎつけたこの小説は、時代の無意識を内に孕んでおり、その時代の先達が到達しえた最も高度な精神性を後世のわれわれに伝えているように思われる。

このように『静かな生活』は、初期小説との比較においても、卑近な日常を描いた自伝的小説の枠組みを超えた、思想的な広がりをもつ作品であることがわかる。

「凡庸で陰惨なある殺人のロジック」の超克——福音書とカミュの挑戦

「これは、凡庸で大変陰惨なある殺人のロジック（la logique banale et très sombre d'un meurtre）に従って、一息で書かれた本だ⁷」——のちにデュラス自身が本作をこのように評しているが、その意味するところは何だろうか。「ある殺人のロジック」とは、人類の曙にまでさかのぼる、太古の昔から繰り返されてきたあの「殺人」を指しているのか。ここでは小説『静かな生活』

⁵ Marguerite Duras, *La Douleur*, Paris, P. O. L., 1985 ; Paris, Gallimard, 1997.

⁶ 作家の伝記的事実については以下の2点を参照した。

1. Laure Adler, *Marguerite Duras*, Paris, Gallimard, coll. « Folio » 3417, 2000.

2. Jean Vallier, *C'était Marguerite Duras : Tome I 1914-1945*, Paris, Fayard, 2006.

⁷ Marguerite Duras, *Écrire*, op. cit., p. 36.

がデュラス作品史において看過できない理由を、人間の死をめぐるある普遍的な原理を率直な言葉で描き出している点に求めたい。

十字架にもフォルムが似た柱の振り子時計を凝視する叔父ジェローム、その身体は日の光を浴び光り輝く——ジェロームの最期を要約するくだりを読み返してみると、やはりキリストを思わせる。しかし「皮肉に満ちた、好意的ではない⁸」描き方であり、本来のキリストの受難にまでその死は高められていない。「鳥のように」、言い換えれば「聖霊のように」自死したニコラもしかりである。

家族を壊し疎まれ憎まれた叔父、そして不器用ながらも家族に尽くし愛されたニコラさえも、危機に瀕した「家族」という共同体が、その利己的生存本能から身代わりに捧げた犠牲者である。そこには作者自身の言う「凡庸で陰惨なある殺人のロジック」が見え隠れしている。

哲学者ルネ・ジラルは、宗教人類学的な立場から福音書の再解釈を提示し、キリストの受難が集団の自浄作用とも言うべきサクリファイスとは決定的に異なることを証明した。人類の共同体は、その長い歴史を通じて権力維持装置としての生贄儀式・公開処刑を利用してきた。民衆のフラストレーションを巧みに統御して、マージナルな存在、社会的弱者に収斂させる。この典型的な差別・排斥のシステム、ジラルの言う「この世の原初から隠蔽されていること（*Des choses cachées depuis la fondation du monde*）」を暴き立てたことこそが、福音の先見性であった⁹。キリストの革新性は、時の権力に利用され犠牲になったことではなく、憎しみ合う不健全な共同体の息の根を止め、人間の野蛮な営為に終止符を打ち、隣人愛に基づく真の共同体を再生させたことにあったと言えよう。

デュラスはこの福音書の意図をどこまで理解していたらうか。無信仰者を公言していたデュラスだが、逆説的にも福音書を熱心に読んでいたことは

⁸ Jean Pierrot, *Marguerite Duras*, Paris, Éditions José Corti, 1987, p. 34.

⁹ René Girard, *Des Choses cachées depuis la fondation du monde : recherches avec Jean-Michel Oughourlian et Guy Lefort*, Paris, Bernard Grasset, 1978.

あまり知られていない¹⁰。『静かな生活』において作者の現身と言えるフランスウは、弟を焚き付け叔父を殺害するよう仕向けた。彼女に罪悪感はないのか。ニコラの死は、家族の苦しみを終わらせるには避けようのなかった必要悪の出来事として片づけてしまっているのか。憎しみ合う家族からの離脱は、はたしてキリスト的な救済をもたらしたと言えるのか。

考察の参考になるのは、その影響が色濃く見られるカミュである。担当編集者だったレイモン・クノーも指摘しているように、この作品を支配する、人の死に対する恐るべき無関心さは『異邦人』のそれにほかならない。母の訃報を受け取っても動揺の一つもないムルソーのように、フランスウは叔父の殺害を冷静沈着と画策し、弟の死を泰然自若として見届ける。ムルソーが殺人動機を太陽に求めたのと同じ非合理さで以て、フランスウは休暇先で、溺死しかけている男性を、現場に居合わせた最後の証人にもかかわらず、助けを呼ばず黙視してしまう。翌朝ホテルの食堂で泊り客の話題になった折には、「私はその人を最後に見ました」と言い放ち場を凍らせることになるのだが、このシーンはまさに、ムルソーの裁判での傍聴席の人々の反応そのものではないか。

この冷酷非情なまでのアパシー、人間社会から乖離した離人的な世界観から判断すれば、カミュにしるその実存主義文学を踏襲したデュラスにしる、共同体の一員の死を、その存続を賭けた不可避のサクリファイスとして神話的射程で捉えていたものと考えられよう。

しかし一方で奇妙なことに、カミュはこの「無垢な殺人者」たるムルソーを「われわれにふさわしい唯一のキリスト」、神なき現代の救世主に例えていることを想起したい。作家はその理由を以下のように説明している。

主人公が罰せられるのは、社会というゲームに参加しないからだ。その意味でムルソーは彼の生きる社会に対して異質な存在だし、孤独で官能的な

¹⁰ « “Quelque part ailleurs en étant là” : le bon plaisir de Marguerite Duras », France-Culture, 20 octobre 1984.

自らの私生活の舞台である下町をひっそりと徘徊する。だから読者は彼を漂流物のように見なしたくなる。ムルソーは演技しないから。答えはごく簡単だ。彼はうそをつくことを拒んでいるのだ¹¹。

実存主義哲学の祖とも言われるパスカルもまた、「既存のモラルを問い直すことが真のモラルだ¹²」と言っている。ムルソーがキリストたる所以は、理由なき殺人を以て、図らずも生まれ落ちた自らの所属共同体にノンを突き付け、殺人を悪とする一見自明な倫理観を問い直していることにある。カミュの不条理文学はこうして、二つの非道な大戦を通じて人間への信が揺らいだ戦後初期に、憎しみ合い・殺し合いによってしか問題解決に至れない未開社会との決別を図ろうとした。同様に、差別・排斥といった否定的な動機によって絆を深める無益な集団ゲームを暴き立てたという意味では、デュラスはカミュの言う福音の真意を理解し、現代のキリストを女主人公の座に据えることに成功したと言えようか。

しかしクノーが出版を許可するものの「『異邦人』の焼き直しに成功しているとは必ずしも言い難い」と苦言を呈しているとすれば¹³、それは結末の「明るさ」ではないか。ムルソーが一切の英雄的な行為なく真実のために死を受け入れ処刑台に上がるのに対し、フランスウは不気味なまでの無関心さを共有しているとはいえ、婚約という一つの幸福のかたちを、魂の平安を、「静かな生活」を望み通り手に入れることになる。最後まで世界を拒み続け死を以てその罪を償ったムルソーに対し、新しい共同体を拓くことでその罪を贖い生の世界へ還ってゆくフランスウ。その結末に幾ばくかの不誠実さを、あるいは地母神的な生命力を見るべきだろうか。

¹¹ Albert Camus, « Préface à l'édition universitaire américaine de *L'Étranger* », *Théâtre, récits, nouvelles*, édité par Roger Quilliot, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade » 161, 1963, p. 1929.

¹² Blaise Pascal, *Les Pensées*, fragment 467, Paris, Gallimard, 1977 ; 2000, p. 330.

¹³ Jean Vallier, *C'était Marguerite Duras*, op. cit., p. 665.

フォークナーと共に——自然との融合、自己との和解

この作品を、自伝的小説に留まらない重層的な作品たらしめているもうひとつの理由に、自然描写とその中で開花する新しい身体性の描写がある。その地母神的なインスピレーションには、デュラスが愛読してやまなかったフォークナーの影響が見られるのではないだろうか。とりわけ作家が好んだ『八月の光』の中で、タイトルの由来となる南部特有の季節の移ろいを、語り手は以下のように説明している。

ミシシッピ州の八月には、月の半ば頃、とつぜん秋の前触れのような日がやってくる。暑さが落ちて、大気に満ちる光は、今日の太陽から来るというよりも、古代ギリシアのオリンポス山あたりから差し込んでくる感じになる¹⁴。

この古代ギリシャの聖地から差し込む光に例えられた晩夏の光を、デュラスは『静かな生活』で次のように描いている。

八月は、すべての樹が一夜で花を咲かせると、そのあとで、己れの花を開く。どうしたらこの八月の頂に立っていられるだろうか。どうしたらこの九月を前にした八月のこのめまいを、一瞬間、体験できるだろうか。森、成熟した平野、熱い絶壁、それらは超自然的茫然自失の中でじっと動かなかったが、その真ん中で九月と十月とがゆっくりと作られていた¹⁵。

作品を通して描かれる農作業と季節の描写は、田園風景描写による絵画的な効果を出すよりむしろ、自然の円環性を強調するためである。自然が生まれやがては死に至るように、人々の絆もまた生まれ死に至る。晩夏の光が異教の聖地から差し込む光に喩えられていることから、人類の生死の無限のサイクルがその歴史を作っているという神話的な世界観を提示していると一方では言える。

¹⁴ フォークナー『八月の光』加藤祥造訳、新潮文庫、1967年、p. 18.

¹⁵ Marguerite Duras, *La Vie tranquille*, op. cit., p. 71. (白井浩司訳、p. 74)

しかしその一方で『八月の光』においてこの光が象徴するのは「新しい生命」であり、子を産むためにあらゆる軋轢を乗り越え南部奴隷制の暗黒の歴史を塗り替えるリーナ・グルーヴの生命力である。『静かな生活』においても弟ニコラと女中クレマンスの間に生まれた子が希望の象徴として描かれており、そのことからフォークナー的視点から読み直す『静かな生活』は、共同体の再生を描いた福音書であるとも言えないだろうか。

また『静かな生活』第2章では、休暇先でのノルマンディーの海との邂逅を通じて、新しい身体性が紡ぎ出される。カミュが『異邦人』でそうしたように、自然を人間界との決別による実存の覚醒への契機として描いている。横溢する海の精気は主人公の全身に漲り、あらゆる思惟思念を中性化する。精神が剥奪され、人は空っぽの肉塊と化し、駆り立てられるように生き急ぐ。

なかば開いたわきの下から、冷えた腐敗土のにおいが立ちのぼるが、それは私のおいだ。私の皮膚のかけで私の肉が活動し、いつも同じようにがつがつと一日一日を食い尽くす。(…) 肉体という小さな野原であらゆることが起こったし、あらゆることが起こるだろう。

私は、深みから私に吐きかけた大地の、泥にまみれた暑い玄関先に滞在した。そしてついに私は到着した。漸く表面にでる。(…) 私は花だ。私のかからだのあらゆる部分が、日の力のもとで破裂し、私の指は掌の力で、足は腹の力で、さらには髪の前までが頭の力で破裂する。私は生まれたことに、この生の終わりに到着したことに、激しい疲労を覚える。私以前に私の場所はなにもなかった¹⁶。

海は新しい人間を育む母胎となって、その誕生を祝福する。海の鼓動を聞き欲望の権化となり、たまゆらの生を心ゆくまで享受すること。ここには、デュラスの座右の書であった旧約聖書コヘレトの書に顕著な享楽主義の影響を見ることができるかもしれない。

¹⁶ Marguerite Duras, *La Vie tranquille*, op. cit., p. 139-143. (白井訳, p. 155-160)

コヘレトの観照の境地——時は巡り、時は進む

『静かな生活』がデュラス作品史において重要な位置を占めている最後の理由として、のちの作品の素地となるコヘレトの思想の多面的理解が挙げられないだろうか。18歳の時分、生まれ育ったフランス旧植民地ベトナムを離れ、故国フランスに渡ったデュラス、博識のユダヤ人青年通称フレディに出会い、気乗りしないまま聖書の手ほどきを受け、とりわけコヘレトの書にふれたのは、周知の事実だ¹⁷。

コヘレトの書は、ソロモン王壮年期の書と言われており、権力を掌中に富を築き愉悦を追求した末の王の虚無感が、韻律を踏んで巧みに表現されている。色即是空、諸行無常を唱える東洋思想に近く、聖書の中でも最も異教的な書とされているのが特徴だ。賢者はその抜きんでた知恵が災いし疎まれ、愚者と同じ扱いを受ける。善人でありながら正しい報いを受けず悪人が暴利をむさぼる。富める者はさらに富み、貧しい者はさらに貧する。その世界の不公平さ。健やかなる時もあれば病める時もある。その時の不確かさ。予測不能な世事に対し未来を危惧して何になろう。むしろこの泡沫夢幻の生を謳歌せん——。しかしこうした不条理な世の中で誰にでも等しく臨むのが、死という人の宿命であるとコヘレトは説く。

メメント・モリ——コヘレトが、不毛な生ゆえの死の優位性を説くにとどまらず、死を想うことで生の尊さへの気づきを促すように、『静かな生活』では死の想念が繰り返し回帰する。「いつの日か私の死が肉体を齧りだし、口から取りついて、ついには私たちが、小石の群れと見分けがつかなくなることを望む」。「私のものである私の死。その穴をふさぐべきではない。この穴のおかげで、私の頭を一杯に占めているすべてのものを徹底的に軽くすることができるのだ¹⁸」。「死者たちは、さわやかで暖かい墓地のなか至るところで横たわっている。私もまた、いつかはそうなる¹⁹」。来るべく死を

¹⁷ Marguerite Duras, *La Couleur des mots : entretiens avec Dominique Noguez autour de huit films*, Paris, Benoît Jacob, 2001, p. 75.

¹⁸ Marguerite Duras, *La Vie tranquille*, op. cit., p. 139-140. (白井訳、p. 156)

¹⁹ Marguerite Duras, *La Vie tranquille*, op. cit., p. 200. (白井訳、p. 229)

冷徹なまなざしで見つめ、死を恐れる心の先にある希望のような「死の白い光」、倦怠が支配する永すぎた子供時代に終止符を打つ「死」と言ったように、「死」による救済の観念にまで辿りついている。ここでコヘレトの言葉に改めて耳を傾けてみる。

エルサレムの王、ダヴィデの子、コヘレトの言葉。

コヘレトは言う。虚しいかな、虚しいかな、すべては虚しい。

太陽の下ひとは労苦を重ねるが、すべての労苦も何になろう。

一代過ぎればまた一代が起こり、永遠に耐えるのは大地。

日は昇り、日は沈み、あえぎ昇り、また昇る。

風は南に向かい北へ巡り、風はただ巡りつつ吹き続ける。

川はみな海に注ぐが海は満ちることなくどの川も繰り返して流れる。

何もかも物憂い。語り尽すこともできず、目は見飽きることなく耳は聞いても満たされない。

かつてあったことはこれからもあり、かつて起こったことはこれから起こる。太陽の下、新しいものは何一つない。

見よ、これこそ新しいと言ってみてもこの時代の前にもあった。

昔のことに心を止める者はない。これから先にあることも、その後の世にはだれも心に留めはしない。（1章1～12節）

永劫回帰する宇宙のサイクルとその倦怠をコヘレトは、「日の下に（sous le soleil）（新しいものはなにもない）」とヘミングウェイの小説のタイトルにもなった「日はまた昇る（le soleil se lève aussi）」で表現している。何が起ころうと、どんな不幸が心を惑わそうとも、日はまた昇る。この揺るぎない覚知は『静かな生活』においても、一人称の独白のなかにリフレインのように幾度もこだまする。

明日、明後日、労働をまたはじめねばならないのだ。いつも同じことだ。金持ちと貧乏人がいる。私はいつになっても貧乏人だろう。私はからだは労働用にできている。とても体格がよく、頑健だ。（…）しかしまた、倦怠のなかで、雨のなかで、ゆとりを持つこと。朝の五時、氷点下の気温のなかをたばこ畑で働くこと。（…）じつをいうと、やり直すことは別にいやではない。

疲れはしないのだ。(…)下方をリソール川が流れており、泡立つ白い、愛すべき太陽がまた昇ろうとしている²⁰。

しかしコヘレトのもうひとつのメッセージを看過してはならないだろう。それは、その倦むことなく巡り巡る時のサイクルにあって、確実に前進すること、古い時の終わりと新しい時の始まりがあるということだ。「生まれる時、死ぬ時、植える時、収穫する時、殺す時、癒す時、破壊する時、構築する時、泣く時、笑う時、嘆く時、踊る時」（3章2～4節）——物事にはそれぞれの時、神のみぞ知る定めの時があるということだ。『静かな生活』がデュラス作品史において意義深い作品たる所以は、コヘレトしながら、時の円環のみならず、この来たるべくして来る時の恩寵を描き出しているからではないだろうか。フランスウは言う。「私は、風のシンバルの中で爆発した陰気なばか騒ぎに、一瞬間だけ参加したところだった。家々は閉ざされ、船員たちは姿を消し、からの列車ががたがたと動き、よそものである私は、風の鞭で追われて……²¹」

晩年の作品における初期テーマの展開

その後に続く言葉は「書く」かもしれない。書くことの哲学がコヘレトの思想を背景に錬磨されるのは晩年の作品においてだが、その萌芽が既にここに垣間見える。ここでは、成熟期の作品におけるカミュ的なキリスト像、またコヘレト的なモチーフがいかに関係するかの検証することで、『静かな生活』がデュラス作品史においてその後の作品を方向付ける重要な作品として、成熟期の作品へと脈々と受け継がれるテーマ系の素地となっていることを見ていく。

『静かな生活』において素描された現代のキリスト像は、戦後のデュラス

²⁰ Marguerite Duras, *La Vie tranquille*, op. cit., p. 194-195. (白井訳, p. 222)

²¹ Marguerite Duras, *La Vie tranquille*, op. cit., p. 149-150. (白井訳, p. 167)

作品を通じて様々に変奏されてゆく。初期小説²²では戦争の犠牲者として、戯曲『セヌ・エ・トワーズの陸橋』²³では閉鎖的な村社会におけるスケープゴートとして、小説『副領事』²⁴では、報われない愛の苦悩の権化として描かれている。その流れの中で『若い英国人兵士の死』²⁵では、「ノルマンディーのリンゴの木に磔にされた (crucifié)」兵士の残虐な最期、それに好奇の視線を向ける村人たちが描かれ、また作者の感情吐露が過剰な印象を与えとはいえ、基本的には不条理な死へのアイロニーが影を潜め、福音書に忠実なキリスト像が提示されている。デュラスが晩年好んで訪れたという村の教会の美しさが強調され、花の絶えない兵士の墓碑に集う吊いのコミュニオンが言祝がれてもいる。『静かな生活』では、身近な家族の物語ゆえの躊躇いと自ら加担したことへの罪責感から、スケープゴート現象は婉曲的な形でしか退けられていなかった。その一方この作品では兵士の死はキリストの受難として描かれており、作家のカトリックへの回帰が読み取れなくもない。『静かな生活』が告解の書であるとする、アルコール中毒による昏睡状態を脱し、来たる死を意識して口述筆記されたこの作品は、さながら信条告白を兼ねた遺書の呈である。

またコヘレトの書の影響は、共産主義との決別とメシアなきメシアニズムを描いた映画『トラック』²⁶に色濃い。また『80年夏』²⁷は、海辺の天候に当時の世界情勢を重ね、例えば荒れ狂う海の描写により共産主義と東側諸国の崩壊を暗示するなど、一見預言書の時評の趣である。しかしコヘレト的懷疑思想が、核の黙示録のような安易な終末論の高揚ではなく、世界を觀照する姿勢を説いている。そうした古代の賢者の達觀が最も顕著に描かれているのは、先述の一節が引用されている小説『夏の雨』であろう。

²² Marguerite Duras, *Les Petits chevaux de Tarquinia*, Paris, Gallimard, 1953 ; 1996.

²³ Marguerite Duras, *Les Viaducs de la Seine-et-Oise*, Paris, Gallimard, 1969.

²⁴ Marguerite Duras, *Le Vice-consul*, Paris, Gallimard, 1966 ; 2000.

²⁵ Marguerite Duras, « La Mort du jeune aviateur anglais », *Écrire, op. cit.*

²⁶ Marguerite Duras, *Le Camion*, Paris, Éditions de Minuit, 1977.

²⁷ Marguerite Duras, *L'Été 80*, Paris, Éditions de Minuit, 1980, rééd. 1992.

本小説は「学校へ行きたくないのは、僕が知らないことを先生が教えるからだ」と真顔で屁理屈を言う天才児エルネストの物語である。一見支離滅裂な登場人物たちの対話の中に、神の不在の現在を問う作者の否定神学が織り込まれている。コヘレトは人知の虚しさを説き、なかでも小説の最後、エルネストがコヘレトのパラフレーズを朗誦するシーンでは、あらゆる人間の営為の空しさを謳っている。

私、ダビデ王の息子、エルサレムの王は、希望を失った、とエルネストは語る。望んだことすべてを私は悔いている (J'ai regretté)。

悪。疑い。不信、それに先立つ確信さえも。

ベスト。私はベストを悔いている (J'ai regretté)。

神を求めての不毛な探求。

飢え。貧困と飢え。戦争。私は戦争を悔いている (J'ai regretté)。

人生のセレモニー。

あらゆる過ち。嘘、悪、疑いを私は悔いている (J'ai regretté)。

詩と歌。沈黙を私は悔いている (J'ai regretté)。そして驕りも。罪も²⁸。

パスカルが言うところの「気晴らし」の対象——「いかなるものも慰められない人間の脆弱な、死すべき、何より惨めな存在の条件」から巧みに目をそらしてくれるもの、例えば「ゲーム、女のおしゃべり、戦争、偉業²⁹」——を思い起こさせる。成功体験、勝負に勝つこと、束の間でも強烈な生の実感を保証するあらゆる行為と企ては、この癒し難い倦怠への特効薬だ。うつつを抜かすための絵空事を辟易するまで列挙する——、これはブランショが「密やかに不信心な³⁰」と形容する世俗人の主の祈りではないだろうか。虚栄を追い求めてやまない人間の業の深さ、それへの悔悛の情が、ヴェルレーヌ風のカンティレーヌに乗せて歌われる。この後夏を知らせる雨が降り、神の恩寵であるかのようにすべてを、あらゆる迷妄とそれが引き起こす煩悶とを洗

²⁸ Marguerite Duras, *La Pluie d'été*, Paris, P. O. L, 1990 ; Paris, Gallimard, 1998, p. 144.

²⁹ Blaise Pascal, *Pensées*, fragment 126, *op. cit.*, p. 118-119.

³⁰ Maurice Blanchot, *L'Entretien infini*, Paris, Gallimard, 1969, p. 366.

い流す。『夏の雨』においてコヘレトの言葉はこうして、人生の黄昏時にあるデュラスに、来し方を振り返り人生賛歌を歌い上げる機会を提供したと言えようか。

それとは対照的に、マルグリット・デュラス弱冠29歳、作家として駆け出しの頃に書かれた『静かな生活』には、コヘレトの世界観を通じて、青年期から壮年期に向かう人生への覚悟とともに、混迷する時代に翻弄されながらも見出した天職への深い矜持が刻まれている。そもそもなぜ作家は、父方の所有地があったフランス南西部のごく平凡な田舎の小村の名前をその筆名に選んだのか。本姓 *Donnadieu* が「神に捧げられた (*donné à Dieu*)」を意味し、無信仰者たる作者にはおよそふさわしくないこともあるが、まずは作家を志すべく象徴的に血縁を断つ必要があったからではないか。早逝した数学教師の父、上の兄を溺愛した母、下の兄との近親相姦の慕情——そうしたあらゆる幼少期の血の記憶を葬り、新しい精神の系譜に自らをなぞらえることが、作家を志す彼女にとっての急務であった。この作品の献辞が母親に捧げられているのは、こうした背景から、女手一つで3人の子供を育てた母へのオマージュであるとともに、教職以外は認めず作家になることに理解を示さなかった母との決別の意もあるだろう。

とはいえ50年の時を隔てて『静かな生活』と『夏の雨』とを結ぶひとつの水脈がある。それは人間の力強い肯定である。二つの大戦の惨禍を経て書かれた『静かな生活』は、病める家族の再生の物語を通じて永劫回帰する時の更新を描き、人類への信を恢復しようとした。また戦後のイデオロギー闘争を経て書かれた『夏の雨』もまた、コヘレトの韻律に乗せて人間存在の儚さだけでなく「我々はみな英雄である」とその偉大さを謳った。

「無限空間の永遠の沈黙」に投げ出され、不条理な運命に翻弄される人間は確かに脆弱な存在だ。しかしパスカルは人間の本質はその惨めさだけではないとし、論理を逆転させうえて「考える葦」たる人間の偉大さは、「偉大さを証明しさえするこれらすべての惨めさ」、「偉大なる主の、身包み剥がされた王の惨めさ³¹」にこそあると考えた。人間が英雄たる、王たる所以

³¹ Blaise Pascal, *Pensées*, fragment 107, *op. cit.*, p. 106.

——、それは、もしデュラスが映画『トラック』の老いた狂女を形容して言った言葉を借りるなら、「凡庸さと言う高貴さ（la noblesse de la banalité）」にあるだろう。コヘレトの言葉がデュラスに教唆した最高の教えは、この力強い肯定の力、狂女がたどり着いた「陽気な絶望（le gai désespoir）」の高みから響く、人間礼賛であった。そしてそれこそが、小説『静かな生活』が、その先見の明で以てデュラス文学の核に据えた思想ではなかっただろうか。